

研究集会「民俗学からみる生活変化」報告

宮内 貴久*

研究集会「民俗学からみる生活変化」

日時：平成27年10月4日（日）13：00～17：00

場所：お茶の水女子大学本館306室

主催：国立歴史民俗博物館・お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター

●趣旨

私たちの生活は、昭和30年代から40年代にかけての高度経済成長期を経るなかで大きく変化した。身近な家庭生活でも、洗濯機や冷蔵庫、プロパンガスなどの普及で女性の家事労働は楽になり、モータリゼーションと流通網の整備、スーパーマーケットの普及によって食生活も手作りから購入へと変わっていった。それこそ現代生活への出発点でもあったのである。テレビや洗濯機、電気釜などの家電製品が都市部で普及率40%前後の頃、農村部ではまだ10%程度で（『厚生白書』昭和35年版）、都市部でもとくに団地で普及が早かったことが指摘されている（『国民生活白書』1960年）。車の普及は農家世帯でも進み、それによって若い世代は会社や工場勤務ができるようになり、親世代は農業、息子世代は勤めにとという兼業農家化が進んだ（加瀬和俊「農村と地域の変貌」（『日本史講座10 戦後日本論』東京大学出版会 2005年）。

このような生活変化についてはもちろん民俗学だけでなく経済史学によるこの時代に特徴的な統計的事象や経済活動に注目した事例研究が蓄積さ

れている。私たちはそれらの先行研究を参考にしながら、「数値」とともに生活変化の「実感」についても、2010年代の現在に至るまでの長いスパンで生活変遷をみていこうと考えている。豊かな物資の購入による生活の変化は人々の意識や感覚においてどのような変化をもたらしたのか。また高度経済成長の時代に起こった変化が現在にまでどのように影響し、さらに変化してきているのか、一定の時間幅の中での生活変化を捉えてみることにしたい。

そこで、本研究集会では、まず団地生活と家電製品の普及、ついで石油やガスの普及による山林の植生の変化、食生活の変化、そして沖縄における生活変化の実感としてのモータリゼーションと祖先祭祀の変化、そして、私たちがこれまでの共同研究で共有してきた1960年代前後の変化について再確認し、それから約40年以上を経た2000年以降の現在の生活変化の実情について、時代的な相互比較の視点からの発表を試みる。

本研究集会の基礎となっているのは、国立歴史民俗博物館の基盤研究「高度経済成長と地域社会の変化」（2013～15年度）であり、その成果を同時代の体験者の方には世代的にもシンパシーをもって受けとっていただけるように、また平成生まれの学生の皆さんには祖父母世代が体験した生活の変化の実態についてわかりやすい発表を、と考えている。

「民俗学からみる生活変化」関沢まゆみ（国立歴史民俗博物館）

*お茶の水女子大学教授

「団地生活と家電製品」宮内貴久（お茶の水女子大学）

「高度経済成長と植生景観の変化」小椋純一（京都精華大学）

「食生活の変化－お煮しめからサラダへ－」関沢まゆみ

「日本食の移動－グローバルな視点から－」イヤル・ベン・アリ（キネレット大学社会安全保障センター・所長）

「沖縄の高度成長と祖先祭祀の再開」武井基晃（筑波大学）

「生活変化とその年代比較－昭和30, 40年代と平成10,20年代と－」新谷尚紀（國學院大學）